



Osaka Gakuin University Repository

Title	アイルランド大飢饉の研究動向——歴史研究と歴史認識 The Great Irish Famine: Historical Research and Historical Consciousness
Author(s)	武井 章弘 (Akihiro Takei) 勝田 俊輔 (Shunsuke Katsuta)
Citation	大阪学院大学 経済論集 (THE OSAKA GAKUIN REVIEW OF ECONOMICS), 第 33 巻第 1-2 号 : 33-50
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

アイルランド大飢饉の研究動向——歴史研究と歴史認識

武井 章弘¹⁾
勝田 俊輔²⁾

要 旨

本稿では、勝田俊輔・高神信一編著『アイルランド大飢饉』についての齋藤英里氏による書評『歴史と経済』240号（2018）への回答という形を借りて、アイルランド大飢饉の研究動向を紹介する。構成としては、(1)アイルランド大飢饉研究の主要論点の整理、(2)書評で提起された問題への回答、(3)今後の研究の展望の提示、の形で論を進める。

キーワード：アイルランド大飢饉、アイルランド経済史、アイルランド史、歴史認識、
飢饉研究

JEL分類番号：I39, N33, N53.

1) 大阪学院大学 経済学部 教授。

2) 東京大学 大学院人文社会系研究科 教授。

目 次

- (1) はじめに
- (2) 大飢饉——人災論と歴史認識
- (3) 本書に即して
- (4) 大飢饉研究の展望

(1) はじめに

アイルランド大飢饉（1845–50年）は、約100万人もの死者を出しただけでなく、100万人強の人口流出をもたらした。大飢饉発生時のアイルランドの人口は約850万であり、この飢饉は19世紀ヨーロッパにおける最大級の人的災害となった。だが、日本ではアイルランド大飢饉の研究はわずかであり、またそもそも日本の西洋史学は、飢饉なるものに十分な関心を向けてこなかったと言わざるを得ない。その一方英語圏では、1995年の大飢饉150周年を契機に、特にアイルランド共和国、アメリカ合衆国、カナダにおいてアイルランド大飢饉への関心が高まっており、関連する著作が数多く公刊されている。これは学術的な歴史研究に限定された現象ではなく、一般向けの書籍でもベストセラーが出ており、また大飢饉の記念碑が各国に建てられ、さらには「国民大飢饉記念日」がアイルランド共和国で制定されるに至っている。

このような動向の中、日本における大飢饉研究の最近の成果として、勝田俊輔・高神信一編著『アイルランド大飢饉——ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（刀水書房 2016年）が挙げられる。同書は、アイルランド大飢饉を正面から扱った日本で初めての著作であり、また筆者を含む8人の著者が多様な視点から大飢饉を論じたものとして、必ずしも評しやすい本ではなかったにもかかわらず、複数の学術誌に書評が掲載された³⁾。加えて、アイルランド共和国においても、*Irish Economic and Social History* 誌に紹介・書評が掲載さ

3) 永島剛『図書新聞』3264号（2016年）；見市雅俊『史学雑誌』126編4号（2017年）；伊東剛史『科学史研究』281号（2017年）；小関隆『西洋史学』264号（2017年）；齊藤健太郎『大阪産業大学経済論集』18巻2号（2017年）；山根徹也『現代史研究』63号（2017年）；本多三郎「大飢饉はアイルランドからどれだけの人びとを奪ったか—勝田俊輔・高神信一編『アイルランド大飢饉 ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（刀水書房）書評を兼ねて」『エール』37号（2018年）；本多「アイルランドでジャガイモ凶作が何ゆえに大飢饉となったのか」『エール』38号（2019年）。

れた⁴⁾。このように内外で論及される機会に恵まれる一方、評者によっては誌上より問題提起がなされる場合もあった。それに対しては、勝田が代表して回答し、必要と思われる場合は評者の見解を訂正するよう努めてきた⁵⁾。

以上のような経緯の中、齋藤英里氏が『歴史と経済』第240号(2018年)に新たに書評の労を執って下さった。齋藤氏の書評についても、他と同様に評者へ回答すべき論点について執筆者間で検討した。同氏の書評から読み取れることは、アイルランド大飢饉研究の現状に関する把握ならびに同氏の大飢饉観が、本書の立場とかなり異なるということである。何よりも両者の違いには、日本における今後の大飢饉研究の方向性にも関わってくる重要な点が含まれている。

本稿では齋藤氏の書評への回答という形を借りて、アイルランド大飢饉における歴史研究上の論点を整理することで、その成果と課題を明らかにしたい。なお本稿は、共同執筆者の助言を受けて『歴史と経済』への掲載のために準備していたがその機会を得られなかったため、アイルランド大飢饉の研究動向紹介の一環として新たに加筆修正したものである。

(2) 大飢饉——人災論と歴史認識

齋藤氏が本書を評する際の基本的な枠組みは、氏の別な論考にあるように、大飢饉研究史についての以下の認識に基づいている——大飢饉は天災であり、従って為政者を始めとする同時代人の責任は追及し得ない、とする一昔前の解釈にかわって、大飢饉は人災であり、政府は責任を免れ得ないのみならず、これは民族虐殺でもあった、との19世紀以来の解釈が復権し、現在、学界の主流

4) L. M. Cullen, 'Katsuta Shunsuke and Shinichi Takagami (eds.), *Airurandō Dai Kikin: Jagaimo, "Jenosaidō", Jyon Buru* [The Great Famine of Ireland: Potato, 'Genocide' and John Bull] (Tokyo: Tōsui Shobō, 2016)', *Irish Economic and Social History*, vol.45 (2018).

5) 勝田俊輔「見市雅俊氏の書評への反論」『史学雑誌』126編7号(2017年)。

になりつつある⁶⁾。

最初に確認しておくべきことは、「人災」および「責任」の問題については、慎重に論を進める必要があるということである。第一に、大飢饉はアイルランドだけにかかわる問題ではない。大飢饉発生時のアイルランドはグレートブリテン（ブリテン）と連合王国をなしており、当時の連合王国政府は、実質的にはロンドンのブリテン政府であった。従って、大飢饉についての為政者の責任の問題は、特にアイルランドの側において反英ナショナリズムの、すなわち政治的な価値観の影響を受けてしまう可能性があるのである。実際、アイルランド史においては、1740-41年の飢饉の方が大飢饉よりも死亡率は高かったと推測されている⁷⁾。ところが18世紀のアイルランドは単一の王国を形成しており、ブリテン政府の直接の責任を問うことは難しい。こうした事情と、史料の不足があって、1740-41年の飢饉に関する研究は、大飢饉の研究・著作と比べてごくわずかである⁸⁾。

ただし大飢饉研究においても、史料は完全なわけではない。これが慎重を要する第二の理由である。大飢饉前のアイルランドは「統計上の暗黒時代」とさえ言われ、毎年の農業統計は存在しなかった⁹⁾。この状況はその後も続いたため、大飢饉中の農業生産・食糧供給状態については不明な点が多い。さらに最も重要な死亡者数についても、戸籍の不備のため、マクロデータである1841年および1851年のセンサスを比較する形で推算されているに過ぎない。さらにブ

6) 齋藤英里「アイルランド大飢饉と歴史論争——「ミッチェル史観」の再評価をめぐって——」『三田商学研究』48巻5号（2005年）。

7) David Dickson, *Arctic Ireland: The Extraordinary Story of the Great Frost and Forgotten Famine of 1740-41* (Belfast: The White Row Press, 1997), p. 72.

8) E. Margaret Crawford, "Preface", in Crawford (ed.), *Famine: The Irish Experience 900-1900: Subsistence Crisis and Famines in Ireland* (Edinburgh: John Donald Publishers, 1989), p. v.

9) Cormac Ó Gráda, *Ireland before and after the Famine: Explorations in Economic History, 1800-1925*, second edition (Manchester & New York: Manchester U. P., 1993), p. 57.

リテン政府の飢饉救済策は、大飢饉中に一度ならず大きく変更されている。以上の理由から、政府の責任の範囲と程度を数量化されたデータに基づいて厳密に確定することは極めて困難なのである¹⁰⁾。

第三に、さらに重要なこととして、「人災」のうちでも、故意なのか過失なのかの区別をつけておく必要がある。アイルランド大飢饉に関して故意の人災とは、アイルランドの人間を餓死させる目的でブリテン政府が人為的に食糧不足の状態を作りだした、ということの意味する。大飢饉中の政府の救済策に大きな過失があったことは否定できないが、19世紀のブリテン政府が意図的に飢餓政策を行ったとの解釈には相当な無理がある¹¹⁾。だが厄介なことに、大飢饉に関しては、故意人災説を支える強力な言説のひな形が存在する。すなわち、アイルランドのナショナリストだったミッチェル（John Mitchel）が19世紀後半に示した解釈である。ミッチェルによれば、大飢饉中のアイルランドはジャガイモの大凶作に陥っていた一方、穀物や酪農・牧畜産品を含めると食糧は十分に生産できていた。だが政府が輸出禁止策を意図的にとらなかったため、農作物（特に穀物）がブリテンに「輸出」され続けた結果、アイルランドは食糧不足に陥ってしまった。これが大飢饉の真の原因なのであり、こうして人為的につくり出された大飢饉は、それ以前から進められてきた「アイルランド民族」に対するブリテン政府による種々の迫害の（極端な）一環である、ということになる¹²⁾。

この大飢饉解釈は大飢饉に関する唯一の解釈では決してなかったが、大飢饉150周年に際して大飢饉＝ジェノサイド説（故意人災説）として、脚光を浴び

10) 勝田俊輔「救済と改良——大飢饉期のアイルランド——」『歴史学研究 特集人口と権力（Ⅱ）』978号（2018年）、24頁。

11) 勝田・高神編著『アイルランド大飢饉』24-25頁。

12) John Mitchel, ed. by Patrick Maume, *The Last Conquest of Ireland (perhaps)* (Dublin: University College Dublin Press, 2005 originally published in 1861)、特に第12-13章。ミッチェルは同書で「抹殺（exterminate）」の語を用いている（一例として、120、143頁）。

ることとなった。例えば、1996年にニューヨーク州の知事は、「大飢饉は、アイルランドでのジャガイモの大規模な凶作ではなく、ブリテンの人間がアイルランドの民に、生きるのに必要な食物を意図的に与えないようにしたことが原因である」とし、大飢饉をジェノサイドであると言明した¹³⁾。翌1997年にはアイルランド共和国議会で一部の議員が、大飢饉について「ジェノサイド的」との表現を用いている¹⁴⁾。

齋藤氏は、このようなミッチェル流のジェノサイド解釈の「復権」を、肯定的に受けとめているように思われる。氏の上述の論考は、「[「ミッチェル史観」の再評価をめぐる]」を副題に掲げており、冒頭の<要約>では、以下の文言が記される：

……ミッチェルによれば、大飢饉の惨状はイギリス政府の自由放任主義がもたらした人災であり、ジェノサイドであった。修正主義史観の台頭によって大飢饉のこうした悲劇的解釈は後退したが、近年の研究はミッチェルの言説を再評価する傾向にある¹⁵⁾。

また今回の書評でも、ミッチェルによる古典派経済学への非難（ミッチェル

13) *Irish Independent*, 17 Oct. 1996; Thomas J. Archdeacon, “The Irish Famine in American School Curricula”, *Éire-Ireland*, vol. 37, no 1 & 2, 2002, p.140.

14) *Speeches of Labhrás Ó Murchú*, 19, 27 Nov. 1997, 10 Dec. 1998; *Speech of Mick Lanigan*, 27 Nov. 1997（いずれも、同国議会の公式サイト <https://www.oireachtas.ie/>より引用）。

15) 齋藤「アイルランド大飢饉と歴史論争」、113頁；なお、氏は次のようにも論じている。「大飢饉期の大量の死者の発生や移民の流出をジェノサイドだとする民族主義的解釈と、実証に基づく「科学的」な修正主義史観とは大きな隔たりがある。ここには、歴史における「記憶」と「記録」をめぐる複雑な問題が横たわっている。民衆に語り継がれてきた歴史像と、実証史家による修正、さらにそれに対する反批判は、多くの国の歴史問題においてみられるが、それは植民地支配を経験したアイルランド史のさまざまな局面にもあらわれている。」齋藤英里「補説9：大飢饉と現代のアイルランド社会」（上野格・森ありさ・勝田俊輔編『世界歴史大系 アイルランド史』（山川出版社 2018年）所収）、266頁。

によれば、大飢饉の一要因であった)を「普通に言っても大げさである」とした古家弘幸氏の第4章の結論(勝田・高神編著、119頁)に対して、ミッチェルの記述の「誇張」を認めた上で、「だが、ミッチェルの言説にレトリックはないのか」と評し(齋藤書評、55頁)、ミッチェルの「再評価」に傾いている。

だが、大飢饉研究史におけるミッチェルの解釈の「再評価(復権)」なるものについては、留保をつける必要があるだろう。第一に、ミッチェルのように「人災」=ジェノサイドと等号で結んでしまうと、人災説における故意と過失の重要な区別が失われてしまう。第二に、ミッチェルの解釈—表面的な「レトリック」ではなく本質において把握した場合も含めて—の「再評価」は、学術的な歴史研究ではなく大飢饉150周年に高揚した歴史認識の問題として扱うべきである。

第一点について、本書では過失としての人災を加害すなわち故意の人災から区別した上で、大飢饉には人災の側面があったと解釈している(勝田・高神編著、25頁)。齋藤氏の書評も「人災的側面があったことは勝田も否定しない」と確認している(齋藤書評54頁)。ところが、齋藤氏はそれに続く部分で、人災=故意説を取るミッチェルを議論の軸にしてしまう。すなわち、現代アメリカにおけるアイルランド近代史研究の第一人者であるドネリ(James Donnelly Jr)が「そうした誇張にもかかわらず……ミッチェルを再評価した」と指摘するのである(齋藤書評55頁)。

だが「再評価」との表現には慎重を要する。齋藤氏自身、ドネリが「ジェノサイドというミッチェルの見解を誤りとし」ていることを上記の論考で指摘している¹⁶⁾。齋藤氏の引用とは別の箇所でも、ドネリは自身の主著において、ミッチェルについて「明らかに事実を歪め、自分の図式に合わない証拠を排除している」と評しており、ミッチェルの解釈の大前提をなす、大飢饉中のアイルランドには総人口を養うに足る食糧があった、とするテーゼについては、明

16) 齋藤「アイルランド大飢饉と歴史論争」、124頁。

確に否定している¹⁷⁾。要するにドネリは、大飢饉についてのブリテン政府の過失責任は問うものの、ミッチェルの中心的なテーゼである大飢饉＝ジェノサイドを承認してはいない。

ミッチェルの「再評価」について、ドネリのみを根拠に論じるのではフェアでない、との反論があるかも知れない。実はミッチェルは、確かにある部分では「再評価」され「復権」している。だがこのことが、まさしく上記の第二の留保に通ずる。これについては、近年の大飢饉「研究」においてもっとも活発に成果を発信しているキニーリ（Christine Kinealy）の解釈が顕著な例となる。キニーリは、ダブリン大学で博士号（歴史学）を取得し、2019年3月現在アメリカ合衆国のクイニピアック大学（Quinnipiac University）で教鞭をとっている。齋藤氏はキニーリが「ミッチェルの見解を支持した」とする¹⁸⁾。だが、博士論文より後のキニーリの「研究」はかなり目が粗い。代表的な著作である *The Great Irish Famine: Impact, Ideology and Rebellion*（Basingstoke & New York: Palgrave, 2002）や、*Repeal and Revolution: 1848 in Ireland*（Manchester & New York: Manchester U. P., 2009）；*Charity and the Great Hunger in Ireland: The Kindness of Strangers*（London & New York: Bloomsbury, 2013）における註の付け方は相当に乱雑である。また、先行研究の確認が不十分であることは、本書第6章で金澤周作氏が指摘している（勝田・高神編著、142頁、316頁 註5）。端的に言って、キニーリの大飢饉解釈を歴史研究の成果として評価するには重大な疑問符がつく。実は齋藤氏自身も、「ドネリー [ママ] とキニーリー [ママ] の近著を併せて書評したグレイとデイリーは、ともにドネリー [ママ] を高く評価しているのに対し、キニーリー [ママ] については先行研究を軽視していること、食料輸出のデータに再考の余地があるなど類似

17) James S. Donnelly Jr, *The Great Irish Potato Famine* (Stroud: Sutton Publishing, 2001), pp. 120, 215.

18) 齋藤「アイルランド大飢饉と歴史論争」、125頁。

の批判をしている。」と認めている¹⁹⁾。

なおキニーリは、別な論考において、現代アイルランド歴史学を代表する史家であるフォスタ（Roy Foster）が大飢饉を‘Irish holocaust’と表現したと記している。だが²⁰⁾、ナショナリズムに基づくとされる歴史解釈に批判的なフォスタが、このような文言を大飢饉に関して用いるということは、アイルランド史の学術的研究に通じている者にとっては信じがたい。検証するにも、キニーリのこの記述の註は、書名のみで出典頁は示されていない。挙げられたフォスタの著作を同一の版でチェックすると、324頁で‘catastrophe’との表現は用いられているものの、‘holocaust’の表現は見つけ出すことができない。このように、研究者がキニーリを二次的に引用する場合は、他の研究文献と突き合わせながら参照するか、引用者自身が出典をチェックした上で用いるという手間を覚悟しなければならない。

学術的な厳密性の問題に関する他の例を挙げるならば、近年アメリカで出版されたクーガン『飢饉の企て』は無視できない²¹⁾。クーガンは、大飢饉をジェノサイドとして解釈してこなかったとの咎で職業的歴史家たちを「歴史家の労働組合」と称して告発する²²⁾。だがクーガンの書は、本文が230頁を超える書物でありながら註は250程度に過ぎず、うち史料註は多めに数えても50あまりに過ぎない（新史料は皆無）。さらに研究文献からの引用の場合も頁番号が全く記されていないなど、学術的な検証に耐えるものではない。

極端な例がカナダ発の場合にも見られる。カナダで出版された大飢饉エッセ

19) 同上、125頁 註40。

20) “The Great Irish Famine A – Dangerous Memory?”, in Arthur Gribben (ed.), *The Great Famine and the Irish Diaspora in America* (Amhurst: University of Massachusetts Press, 1999), p. 240.

21) Tim Pat Coogan, *The Famine Plot: England’s Role in Ireland’s Greatest Tragedy* (New York: Palgrave Macmillan, 2012).

22) *Ibid.*, pp. 5, 31, 229-231.

イ集『語られざるストーリー』²³⁾の編者は、「大飢饉時のアイルランド人を苦しめた、知られざるホロコーストに正面から向き合う能力を持たない」として、カナダの職業的歴史家を批判した上で、同書的一篇としてキーガン（Gerald Keegan）なる人物の記したとされる大飢饉中の日記を収録したが、これは大飢饉の半世紀後にケベックのジャーナリスト（Robert Seller）によって著された純然たる創作であった。にもかかわらず、同エッセイ集はアイルランド共和国で単著としてベストセラーとなったのである²⁴⁾。

アイルランド史研究における最新の通史であるケンブリッジ版『アイルランド史』では、「今日の職業的歴史家で、【大飢饉を】ジェノサイドとして告発することに同意する者はいない」と総括されている²⁵⁾。以上で論は尽くされたかと思われるが、要するに、ミッチェルの解釈の本質をなす大飢饉＝ジェノサイド説（故意人災説）は、大飢饉自体の学術的研究とは無縁である。

示唆的なことに、アイルランド移民を先祖に持つ英国の高名な文学者イーグルトン（Terry Eagleton）はその著書の中で、アイルランド大飢饉に関してナショナリストたちが「ジェノサイドを……誤って（*misguidedly*）」唱えたことは「驚くにあたらない（*no wonder*）」、としている²⁶⁾。イーグルトンの言葉で重要なのは、「誤って」いることと「驚くにあたらない」ことの両方を認めていることである。すなわち、歴史研究において大飢饉についての「人災」を論

23) Robert O'Driscoll and Lorna Reynolds (eds.), *The Untold Story: The Irish in Canada* (Toronto: Celtic Arts of Canada, 1988).

24) Mark G. McGowan, "Contemporary Links between Canadian and Irish Famine Commemoration", in Marguérite Corporaal, Christopher Cusack, Lindsay Janssen and Ruud van den Beuken (eds.), *Global Legacies of the Great Irish Famine: Transnational and Interdisciplinary Perspectives* (Bern: Peter Lang, 2014), pp. 275-276.

25) Kevin Kenny, "Irish Emigration, c. 1845-1900", in James Kelly (ed.), *The Cambridge History of Ireland: Vol. III 1730-1880* (Cambridge: Cambridge U. P., 2018), p. 671.

26) Terry Eagleton, *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture* (London & New York: Verso, 1995), p. 16. 邦訳（鈴木聡訳）『表象のアイルランド』（紀伊國屋書店 1997）、40頁。

じ、ブリテン政府の責任を追及するのであれば、故意と過失を区別した上で過失の諸側面を取り上げて検討すべきなのである。一方、「故意＝ジェノサイド」の方は、なぜこのような無理のある解釈が脚光を浴びたのか、歴史研究とは別に、歴史認識の問題として検討すべき主題なのである²⁷⁾。

(3) 本書に即して

はじめに、本書に対する齋藤氏の論評について、以下の確認と訂正をしておきたい。齋藤氏は書評の冒頭で、中心的に取り上げる論点として、①大飢饉を機に、ブリテン政府はアイルランド民族の根絶を意図していたという説、および②大飢饉はアイルランド民族や社会全体にとり厄災であったという説、の二つ（本書は、齋藤氏の言うようにこの両者を否定している）を挙げている（齋藤書評54頁、傍点は原文）。だが、②の問題については、齋藤氏の書評で明示的に検討されている部分は見当たらない。

続いて第5章（高神信一）について見る。齋藤氏は同章が、「保守党のピール政権でのトムロコシ粉輸入と公共事業対策が、ホイッグ党のラッセル政権で停止され……改正救貧法による不十分な救済へと転じた経緯を論じる」とまとめた上で、この章ではラッセル政権による救済策が批判されている一方で、ラッセルの前のピール政権による救済策への批判を欠いていると説く（齋藤書評、54頁）。だが、第5章を読めば、「ピール政権とラッセル政権には、大飢饉に対して共通する基本的な考え方があった」（勝田・高神編著、126頁）とあり、ピール政権の救済策を好意的に見ているわけではない。そして、第5章の当該箇所は、「公共事業対策が、ホイッグ党のラッセル政権で停止され【た】」と単純に言える形では書かれていない。むしろ、「公共事業の本格的な運用はラッセルの登場を待たなければならなかった」のであり、公共事業に巨額の資

27) この問題は、本書第1・10章でも扱っているが、別稿（勝田）で論じる予定である。

金が投じられ、大量の人間が雇用されたにもかかわらず、結局この救済事業は失敗し、中止された（勝田・高神編著、130-131頁）と記されている。齋藤氏の批判が的を射ているのかどうか、少なからず疑問が残る。

第4章（古家弘幸）について、齋藤氏は、「ラッセル政権の自由放任政策を背後で支えていた思想は何か、その説明はない」と記している（齋藤書評、55頁）。対して、この章では、「ラッセル率いるホイッグ政権……彼らのマーケットへの信奉は、次のようなスミスの『国富論』の言明を下敷きにしていたとしても不思議ではない」（勝田・高神編著、94頁）としつつ、さらに「マーケットへの介入を拒否する点では、バークの『飢饉論』の議論の方が、彼らをより強く後押ししたかも知れない」、「『飢饉論』は……ホイッグ派の地主政治家には無理なく理解でき、大きな影響も与えたであろう」（勝田・高神編著、94-95頁）と「説明」しており、意を尽くしていると考えられる。

なお第4章の著者は、齋藤氏の記した（齋藤書評、54-55頁）古谷ではなく古家弘幸氏である。また、飢饉に際してのチャリティによる支援について論じた第6章（金澤周作）について、「チャリティをめぐる支援者と非支援者の認識のずれ（齋藤書評、55頁、傍点は筆者による）」との文言は、「支援者と被支援者」の誤記と思われる。なお付言するならば、第6章は「認識のずれ」について、支援者と被支援者の間だけでなく、ブリテンがアイルランドをチャリティで救おうとするのは尊大な振る舞いである、と公言するアイルランドの一部のメディア（被支援者の代弁者）と支援者との間、そしてこうしたメディアと被支援者の間にも存在したことを論じたものである（勝田・高神編著、161-164頁）。

第1章（勝田俊輔）について、齋藤氏は「勝田の叙述はややバランスを欠く」とされる。その根拠としては、「大飢饉を概観するスタンダードな研究書」として、エドワーズ／ウィリアムズの編著、デイリ、オグロウダの単著を詳しく紹介しておきながら（勝田・高神編著、22-23頁）、モキアの研究を取り上げ

ておらず、また大飢饉への関心が高揚し研究が再活性化した後に登場したドネリ、キニーリ、 그레이の名を挙げていない、とされる（齋藤書評、55頁）。

反論を許されるならば、第一に齋藤氏の取り上げた一節は本書において大飢饉の研究史を考察した箇所ではない。「1990年代に入るまで……3点しかなかった」（勝田・高神編著、22頁）として1980年代までの研究の乏しさを指摘したのであり、ドネリらの著作は1990年代に登場したものである。第二に、齋藤氏の挙げたモキアの研究は、確かに1990年代以前だが、副題に*A Quantitative and Analytical History of the Irish Economy, 1800-1850*とあるように²⁸⁾、19世紀前半アイルランド経済の分析に焦点を当てた計量経済史的研究である。また齋藤氏は同書について、カレンが「前述のモキアの研究についても批判的に検討」（齋藤書評、55頁）していると評している。本書の該当頁を氏は明記していないが、第10章（L. M. カレン）のモキアの評価に関する箇所は次である。「1980年代半ばに出たモキアの本についての書評は興味深く、評者は、おそらく幾分かショックを受けつつ、この本は旧来の極端な見解……を支持するように見える、と述べていた。とは言え、……大飢饉を流行の研究領域とする点では有益な先駆者となった。」（勝田・高神編著、前掲書、259-260頁）。また、齋藤氏自身も上述の論考において氏のモキアの評価とカレンによる評価について言及している。氏によれば、「モキア [ママ] は人口圧が貧困と大飢饉の原因とするマルサスの解釈を退け……その一方で、彼はイギリスの政策も批判する。アイルランドの連合王国への統合は不完全で、1847年にはアイルランド人を見捨てることで、彼らを消滅させたとのべている点は、ミッチェルこそ典拠にあげていないが、彼の言説を想起させる」という²⁹⁾。さらに氏は、カレンのモキアに対する評価を次のように紹介している。「本書を書評した

28) Joel Mokyr, *Why Ireland starved: A Quantitative and Analytical History of the Irish Economy, 1800-1850*, revised ed. (London & Boston: George Allen & Unwin, 1985).

29) 齋藤「アイルランド大飢饉と歴史論争」、122頁。

カレンは、大飢饉前に関する解釈はきわめて伝統的で、全体よりも部分に優れていると批判している³⁰⁾。学術的成果は別として、同書を「大飢饉を概観するためのスタンダードな研究書」として取り上げなかったことは妥当ではなからうか。

第三に、キニーリについて取り上げなかったのは、前述の理由によるものであり、グレイの書もハイ・ポリティックスとイデオロギーを主題とするものである³¹⁾。一方、齋藤氏が挙げたうち、「大飢饉を概観するためのスタンダードな研究書」としてはドネリの書が最適かと思われる。しかしながら、もし仮にミッチェル流のジェノサイド解釈の「再評価」を加えることが「バランス」の是正になるのだとしても、ドネリの書がそれに適さないことは既述のとおりである。

なお齋藤氏は、第1章（勝田俊輔）が「1990年代まで大飢饉研究は不活発だった」としている一方で、第10章（L. M. カレン）は大飢饉への「関心の欠如や民衆の沈黙を否定している」ことから、「両章には違いがある」とし、不整合を示唆しているようである（齋藤書評、55頁）。いずれも該当箇所の本書頁が明記されていないが、氏の言う「関心の欠如や民衆の沈黙を否定している」は、第10章の「大飢饉への関心は強かったのである。論文の需要もあった。その需要を満たし得る、あるいはその気のある歴史家が地方でも全国でも不足していただけのことである」（勝田・高神編著、256頁）を指しているようである。他方「1990年代まで大飢饉研究は不活発だった」については、上述のように第1章で「実は1990年代に入るまで、個別テーマに即した研究は別として、大飢饉を概観するためのスタンダードな研究書（一般書ではない）は3点しかなかった」（勝田・高神編著、22頁）と記してある。研究の次元での不活

30) 同上、122頁 註27。

31) Peter Gray, *Famine, Land and Politics: British Government and Irish Society 1843-50* (Dublin: Irish Academic Press, 1999)

発を明言している第10章の当該箇所とは、むしろ合致する記述のはずである。

(4) 大飢饉研究の展望

最後に、齋藤氏の「[21世紀に入ってから大飢饉研究は大きく地平をひろげており]」(勝田・高神編著、24頁)と言うが、具体的に何か(齋藤書評、55頁)に回答することで、この小論を閉じることにしたい(本書においてその試みの一部は開陳してあるのだが)。アイルランド大飢饉は、それ自体が巨大で複合的な現象であった。そのため、人災・天災論を基調としてきた従来の研究の枠組みを組み替えることで、今後も多様な研究成果が期待できるだろう。

まず初めに、近年ではアイルランドとブリテンの二国間関係に限定されない形で大飢饉を解釈しようとする試みが広まっていることを確認したい。本書に「大飢饉とアメリカ移民のナショナリズム」(第7章 高神信一)、「インド19世紀後半の飢饉の歴史像—アイルランド大飢饉との関連で」(第8章 脇村孝平)を収録したのは、そうした試みの一端であった。アイルランド大飢饉と他のヨーロッパ諸国の飢饉の比較も行われている³²⁾。また、大飢饉を北大西洋史の枠組みに位置づけようとする研究も出ている³³⁾。大飢饉によって大量の移民が北米大陸に渡っただけでなく、大飢饉に際しての政府の救済策は、かなりの部分がアメリカ合衆国産のトウモロコシに依拠していた。このため、大飢饉は19世紀半ばの連合王国とアメリカ合衆国の外交関係の変化の契機となった可能性

32) Cormac Ó Gráda, Richard Paping and Eric Vanhaute (eds.), *When the Potato failed: Causes and Effects of the Last European Subsistence Crisis, 1845-1850* (Turnhout: Brepolis, 2007); Declan Curran, Lubomyr Luciuk and Angrew G. Newby (eds.), *Famines in European Economic History: The Last Great European Famines Reconsidered* (London & New York: Routledge, 2015); Guido Alfani & Cormac Ó Gráda, (eds.) *Famine in European History* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017).

33) Corporaal, Cusack, Janssen and van den Beuken (eds.), *Global Legacies of the Great Irish Famine*.

が示されている³⁴⁾。

また、「飢饉の歴史人類学」の可能性も指摘しておこう。飢饉は、差し迫った形で死をもたらすことはないにせよ、ひとたび起これば着実に人々の生命を危機に追い込む。そうした緩慢着実な危機に遭遇したとき、人はどのように振る舞うのか。この問題は、これまでの研究とは次元の異なる、ミクロな共同体の分析において解明されるだろう³⁵⁾。それに加えて、近年その重要性が高まりつつある自然災害と環境史の視点からの研究が加わることも望まれよう³⁶⁾。このようにアイルランド大飢饉の研究は、枠組みを新しくすることで、依然として大きな可能性を秘めていると言えよう。

34) David Sim, *A Union Forever: The Irish Question and U. S. Foreign Relations in the Victorian Age* (Ithaca & London: Cornell U. P., 2013).

35) Breandán Mac Suibhne, *Subjects Lacking Words? : The Gray Zone of the Great Famine* (Hamden: Quinnipiac U. P., 2017).

36) 自然災害と環境史の視点については、次の文献が示唆に富む。アンソニー・リード（太田淳訳）「危機的環境下で歴史を書くということ—「火山の環」はどのように変化をもたらすか」『社会経済史学』79巻4号（2014年）。

The Great Irish Famine: Historical Research and Historical Consciousness

Akihiro Takei · Shunsuke Katsuta

ABSTRACT

Eiri Saito has published a book review of Katsuta Shunsuke and Shinichi Takagami (eds.), *The Great Famine of Ireland: Potato, 'Genocide' and John Bull* (Tokyo: Tōsui Shobō, 2016) on *History and Economy*, 240 (2018). Using the review as a starting point, this paper will firstly summarize the key points under discussion in the historical research of the Great Irish Famine. Secondly, the paper will reply to the questions raised by the review. Finally, the paper will show further prospects in the historical research of the Great Famine.

Keywords : Great Irish Famine; Irish economic history; Irish history;
historical consciousness; famine studies.

JEL Classification Numbers : I39, N33, N53.